



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第五十四号（一日発行）
平成六年三月一日

北海の古平風土物語（二十）

鯨場 古平川原に飛行機隊を落す
担任・千葉栄信主夫先生（二十一歳）

高橋源 五

この年の夏（大正十四年七月十二日）のこと――。

『千葉県津田沼の東亜飛行学校から、飛行機が古平に来る』という、筆太に書かれた宣伝ビラが、店先や町家の板壁にたくさん張り出されていた。

入場見学料金は、大人二十銭・小学生十銭。小学校では児童の希望を取りまとめたが、ほとんどが申し込んだ。

当時、町の人たちの全部とっていい程、生まれて初めて見る飛行機であった。うれしい話題が町中に広がり、みんなが心待ちにしていたのである。

いよいよ当日になった。七月十二日、晴天、無風（郷社・琴平神社の後祭りの日であった）学校では、午後から日の丸の

小旗作りをした。中には軍艦旗を作る者、一人で両方の旗を作る者もいて、なかなか忙しく威勢がよかった。

夕方近くになって、手作りの小旗を振り振り、古平川原にあった競馬場に向かった。（現在の古平中学校グラウンドの辺り）

町の人たちはもちろん、遠くは美国町、積丹、余市町方面からも見学に駆けつけて来た人がたくさんいた。警戒に張られた綱の外側は、集まって来た人でいっぱいになった。

手ぬぐいで頬かぶりをした人や、こうもり傘を日よけにした人も混じって大盛況であった。

剣を腰に吊った警官や、ゴツイ火事羽織姿の消防団の人たちが、勇ましい格好で会場の整理や世話をしていた。

柵の内側には、何十反もの綿布が数十間も敷き詰められていた。飛行機の着陸路だという。会場の準備もできて、みんなは飛行機の飛んで来るのを待っていた。

私たち仲間は、「飛行機は速いもんだ」、「空高く飛べる、いいもんだ」、「強いもんだ」、「ドイツとの戦争に勝つたんだ」（第一次世界大戦で日本軍が膠州湾を攻撃した時のことをいう）、「俺も飛行機乗りになるんだ」、「口々に威勢のいいことを言い合っていたが

《アイヌの奇術》
アイヌの中には、不思議な術を使う者がいる。西蝦夷地のトママイという所に、センカツイというアイヌがいるが、彼はこの術を使うのが巧みであった。

曹谷（宗谷）の支配人をしていた長三郎という者が、その術を見たことがあり、次のように語っていたそうである。

まず両手の親指を合わせて縄で縛らせ、その縄

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

で二の腕も縛り、背中にも縄を掛ける。そして灯りを消し、なにか呪文を唱えようと、家中が笹の葉で撫でまわすような音がし、やがて家中が振動して大きな音がする。音が止んで灯りをつけると、縛った縄が解けている。また灯りを消すと前のように騒がしくなり、灯りをつけて見ると、元のようになっている。彼はそのほか種々の奇術を使うという。

飛行機はなかなか来なかった。見学の大人たちはむしろを敷き、持ち込んだ酒や、重箱に詰めた煮しめなどを広げて、歓迎の前祝い酒宴を始めている。勇ましい軍歌も飛び出して、川原は大賑いであった。

私は頭が痛くなって沢江の山なみを見ていたところ、グウーングウーんと、聞き慣れない底鳴りのする音がして来た。みんなは、「あつ来た来た、今来たんだ」、「ホーイ、ホーイ」と飛び上がって喜んだ。小さな機影がようやく見えたのだ。

「恩師大沢兄が 逝かれて五年」

二月二十四日は、私には忘れられない悲しい日です。

「光陰矢よりも迅かなり身命は露よりも脆し」親しかった否、親しくしていただいた恩師の死は、本当に悲しい事実でした。生前何かとご指導賜ったことを改めてお礼申し上げます。

古小PTA時代より、古平体育連盟会長、そして古平小学校同窓会会長など、ずいぶん長くご厚誼をいただきました。

故郷を想う 福井孝平

今日も、スキーで私は旧家の前を通り、五年前を思い出しております。奥様にもお邪魔をしてはいろいろとご迷惑をかけたことなど、昨日のことのように思い出されます。

わが夫の一周忌法要近づきぬ風荒らぶ夕べの窓に立ちて思へり

夫逝きし日のごと氷雨降り次ぎてけふひととせの法要を終ふ

これは奥様の『歌集・旅の途中』にありましたが、口ずさむほどにグッと胸に響きます。お盆にまたお墓参りが出来るかと思っております。

合掌 釋迦牟尼仏

奥様もどうぞお身体大切に。紙上を借りて平素のご無沙汰お許しください。

先日、山口先生の奥様が来訪された折、恩師のこと、奥様や短歌のこと、手造り寿司を喜ばれたエピソードなど、楽しく話されて帰られました。

夫逝きて和む日のなきわれなれど心ひらきて語る友あり

これも歌集の中にありました。

後輩の面倒見が良かったせいかお弟子さんなど三十余名は今も健在で、どこで逢っても親しく言葉を掛けていただいております。

私も俳句にプラス七・七を加えてニンマリすることもあります。

晩学の余生楽しからず哉！
捨雪のくるまつながる

浜のみち

古平場所と岡田家

岡田家と場所請負

岡田家が古平場所を請け負ったのは、『北海道史』によると宝永三年（一七〇六）となっている。するとこれは、岡田家の四代・弥三右衛門玄正の時代ということになる。

江州地方（ごうしゅう）近江国の別な呼び名で今の滋賀県）には、早くから松前地方と交易をしている人がいたが、岡田家や西川家（忍路・高島の場所請負人）などは著名であった。

またこの地方には、両浜組といわれる柳川町と八幡町の商人たちが、北前船に乗って日本海の荒波を渡り、蝦夷地との交易によって莫大な財産を築いた。岡田家の船印は「いちぜんばし」一膳箸と呼ばれ、割りばしを割ったような二本の棒が帆に描かれていた。

※「北前船」については、別にあとで述べることにする。

岡田家は、郷里の八幡町では松前屋と名乗っていたが、松前（当時は福山とっていた）では恵美須屋とっていた。明治

維新の後、小樽に支店を出したが、その時は大三岡田と改めている。

ただ店を出して商売をしているだけでは利益もしているのだから、早くから交易にかかわっていたようであるが、場所請負人になってから、岡田家の繁栄の基盤が固まったのである。

ここで、蝦夷地での松前藩のことを知る上で肝心な『場所請負制』のことを述べたい。

松前藩は、格式一万石という最も小さい？大名であったが、その領地である蝦夷地では当時米は全く出来なかった。本州の大名は米が収入源であったが松前藩にはその米が無く、それで幕府は松前藩に特例として、蝦夷地での交易（アイヌとの物々交換）の権利を与えた。そこで藩では、松前の商人からアイヌの欲しがるような品物を買ってアイヌの獲った品物と交換し、それを商人に売り、その利益が藩の財政となった。松前藩は大きな会社だったのである。

一兵卒の軍隊日記

[6]

軍隊生活のうらおもて

本間 銀朔

入隊後、初めての英霊を迎えて緊張した。

そのころから「九部隊は千島派遣要員」との噂が、隊内で出はじめていた。それから間もなく、わが二班にも腰に吊り下げた銃剣が何人かに支給された。だんだん千島派遣の話が本当のように思われてきた。その時はその時と、まな板のコイだと観念していた。

ある日のこと、いつものように夜の点呼と学科が終わったあと、二、三人の肩章も付けない古兵（年齢が四十歳過ぎ）が何やら入った飯盒を持って来た。話の様子から、なかに入っているのは焼酎のようであった。そしてそれをストープにのせ、班長らといろんな話をしている。見ていると焼酎の中に砂糖を入れていたが、それがストープにこぼれて、煙が二階にまで匂ってくる。彼らは雑談しながら楽しそうによくやっている。話から、隊では豚を飼っている

が、その古兵は、ずうっとその飼育を担当している万年上等兵？とのことで驚いた。酒などは軍隊に入ってから、今までは二回ほどしか支給がなかったのに、厳しい軍隊の中でどこから持ってきたのか、軍隊の中でこんなこともできるんだという一場面を見た。



阿波萬先生墓碑

禅源寺墓地
建立年月日不詳

古平小学校訓導の阿波萬先生は古平町の出身であり、大変教育に熱心で児童からの信頼も厚い先生でした。

その当時、各地で行われていた青年の夜学会の講師なども進んで引き受け、町内の青年活動の指導にも積極的にかかわっていました。たまたま教育研究のた

炊事当番になると、ジュラルミン製の二十リットルくらい入る食缶を持って、四、五人で飯を受け取りに行く。炊事場ではスコップで飯を入れ、大きな柄杓（ひしゃく）で味噌汁を入れている。飯どきの炊事場は忙しい。食事は飯と味噌汁、それにくあん漬が二切れである。四月になって、生鯀がトラックに満載して運ばれて来た。今年はどこかで鯀が獲れたのかと思っていたら、二日ほどしてから焼いた鯀が半身ついた。どこかの班の新兵が、トラックに積

め出張中、腸チブスに感染し、帰宅後治療に努めました。その甲斐もなく明治二十三年七月十六日死去されました。

その後教えを受けた卒業生が発起人になって、その寄付により墓碑が建てられました。碑銘は、曹洞宗永平寺副管長の福井天章の筆によるものです。

んで来た鯀の数の子を盗んで食べ、下痢をおこした、と班長らが話していたが、「血抜きもしない数の子を食うのは浜育ちではないナ。」と思ったが、かわいそうでもあった。

また、一番嫌いな夜の点呼が始まった。「今夜は何を質問されるのか——」と思っていたらいきなり自分の名前が呼ばれたのでドキッとした。

「明日、中隊長室に使役に行け」と言われ、二度驚いた。

次の日は点呼に出ないで、班長に連れられて事務室に行った。偉い階級の人ばかりで、まともに顔を見れなかった。そして中隊長室に行ったが、そこで初めてわが十和田中隊長の顔を見た。体格の良い、上品な人だった。緊張して立っていると、「そんなに固くならないでもいい。」と言ってくれた。最初に、出身地と勤務先を聞かれたが、その日の仕事は、隊長が見た手紙の検閲欄に十和田の印を押すことであった。やっと家族にも隊内から手紙が出せるようになったのである。五、六百枚ほどの手紙に押印した。仕事を終えて帰る時に煙草「ほまれ」二十本入れ一箱を買った。

蔵地守り子

池田 テル

浜町から畑方面へ行く道端にお堂がある、その中に一体のお地藏様が祀られています。

このお堂は今から三十年ほど前に建てられたものですが、中の地藏様は以前からあつたので、昔、近くの川で幼児の水死事故があつたのがそのいわれです。

この道から少し入った所にきれいな水の湧く泉があつて、ここからは川が流れていました。近くの家では飲み水にしたり、その水を瓶に詰めて畑へ持って行く人や、通りがかりの人が手ですくって飲んだりして、それはよく澄んだきれいな流れでした。家々のまわりは広い畑で、いつも子どもたちが元気に遊んでいました。ある時、幼い子の姿が見えなくなり、慌てて捜しましたがその時はすでに遅く、この川で、可哀想に小さい命を

失つたのです。この後にも又、この川で幼児の悲しい事故が起きました。

それから何年かたつて、亡くなつた幼児の親御さんたちが相談して、再びこのような災禍の起きないように、仏の加護を祈願し、供養にお地藏様を建てることにしました。その名も『子守り地藏』と名付け、事故の続いた川べりに建てたのです。

道辺に在はすお地藏さま
朝々親し声に呼びゆく

【△7日はこんな日】

食糧難に海からの贈り物 十年ぶりの大漁に浜は戦場

[昭和19年]

長い戦争と食糧難、浜での働き手も少なくなつてきていた昭和十九年。この年は、例年になく鯨漁況が良かったが、前年の漁が余りにも悪かつたことや、鯨場で働く若い衆の多くが戦争にかりだされ、人手が足りないことから建網の準備なども遅れていた。

そんな折の四月十日のこと。丸山岬沖の流し網で、鯨が二十

この道を長い間通つたことのある私は、夏はお花でいっぱいになり、冬は綿入れ半纏（はんてん）をお召しのお地藏様をよく思い出すのです。 ※この地藏様を祀つたお堂は、その後場所が転々と移りましたが、今は田島解体工場脇の道端に建っています。



もつて程獲れたという朗報が町中を走つた。

遅れていた建網もようやく整い、総出て刺網も投網された。水試調査船からの「鯨の大群が沿岸に近づいている」という報告に、町中が息をひそめるようにして群衆を待った。

やがて四月十三日の夜、海を埋めつくすように鯨が群衆に来て来た。朝までに、古平で千五百石

古平から積丹沿岸で五千石が水揚げされた。浜は思い掛けない大漁に沸いたが、十四日から十五日にかけてはさらに五千石の水揚げがあつた。しかしその途中、時化でかなりの鯨を放棄するという事態も起きたが、積丹方面では一万三千石も漁獲をしながら、この時化で四千石を超える鯨を放棄したという。

学校は五年生以上の児童を、十日から二十五日まで臨時休業にし、家事や漁場の手伝いをさせることにした。その後も鯨の好漁が続き、四月末までに一万二千石を水揚げし、結局この年の漁獲高は、水試の発表によると一万二千八百八十石であつた。これは、昭和の時代になつてから五番目の漁獲高であり、前年の百二十七石に比べると実に百倍であり、後志でも前年の七十倍を超えた。

積丹から留萌沿岸にかけてのこの大漁も、粒買船（生積船）の燃料不足から輸送がほとんど止まり、また列車による輸送もはかどらず、野積みそのまま腐敗したものもあつたと当時の新聞は報じている。

暗い戦時下、この豊漁で町の人々にも笑顔と活気が戻つた。